

『我身にたどる姫君』について

—— 家系によって宿命的に繰り広げられる愛の諸相 ——

近藤 えり子

『我身にたどる姫君』は、全八巻から成り、現存する中世の物語では『夢の通い路』に次ぐ長篇であり、擬古物語に類されている。作者は未詳、成立年代は文永八（一二七〇）年に近い頃の作品であると思われる。

市古貞次氏が鎌倉中期の物語から本物語と『風につれなき』を取り上げて、更にこの時期の物語の特色を述べておられる。^{注1}。その中で前代の物語、特に『源氏物語』の影響、模倣が著しく、物語作家の創作力の欠如があげられている。本物語も確かに『源氏物語』の影響が随所にみられるが、模倣作品として扱ってよいだろうか。本物語は七代四世代四十五年間を描いた大作であるが、その中に作者自身の創作意図——（家系によって宿命的に繰り広げられる愛の諸相）の描出——が感じられ、また洞察力に満ちた作者の態度が伺えるのである。本論では、作者の創作意図を見出し、その迫力に満ちた描写について述べていく。

第一章 人物の系統性

本物語は皇族出の皇后宮方と藤原摂関家出の中宮方とが対立することに始まり、巻八では、皇族出の右大臣と摂関家出の左大臣とが二重の義兄弟となり、初草姫（右大臣の姫君）の東宮参りには心から協力する大団円を迎える至りとなっている。その間に皇族——摂関家間による三つの密通とその子の誕生が描かれ、それが皇位継承者の血に流れ込む仕組みになっており、その対立は解消される。この結果にたどりつく迄に（家系による人物の系統性）を感じる部分が少なくない。第一章では関白家系、皇后宮腹系と中宮腹系の女性を取り上げて、その人物の系統性をみていく。

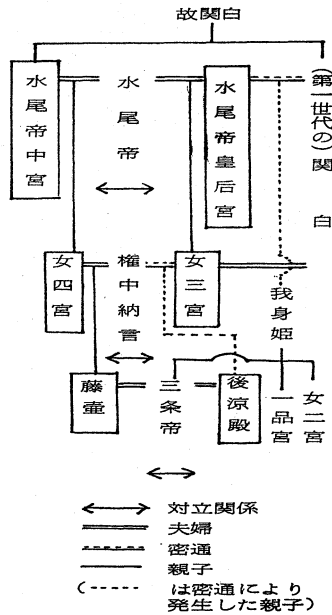
第一節 関白家系

関白——権中納言（三位中将）——殿の中將（左大将）
関白——権中納言（三位中将）——殿の中將（左大将）
注——は親子
関係を示す

この三世代には以下のような共通点が指摘できる。関白家として世間の信望が厚く、娘の入内で地位を確実にしている。また三世代とも好色で、道ならぬ恋の密通に関連し、いずれも女兒が生まれており、その存在を途中まで或いは

永遠に知らされないでいる。関白は水尾帝皇后宮との間に我身姫を設け、後に引き取っている。権中納言は女三宮との間に後涼殿を設け、その事実を知らない。殿の中將は三条帝女御の麗景殿との間に忍草姫を設け、後に引き取っている。また世間の信望は厚いといっても中宮腹系の女性の我執の強さによりその存在感が稀薄であり、表面的な感がぬぐいされないことが挙げられよう。

第二節 皇后宮腹系と中宮腹系の女性



この二家系は事あるごとに対立関係にあり、またその家系それぞれに系統性を感じさせる点が少なくない。尚、我身姫・一品宮、女二宮は、皇后宮腹系であることは非公然であり、直接対立関係には置かれぬが、共通点を見出すことができる。が、この三人については第二章第二節で述べることとする。

三代にわたって両家系には次のような共通点や傾向が見

出せる。

まず皇后宮腹系について。美貌の持ち主であり、それが母親に酷似している。夫の寵愛には恵まれているが、その意志の表出は中宮腹系に押えられ、憂き目をみることが多く、悲劇のヒロイン的存在である。また意に反して密通に関連し、その相手の子を身籠り、女児を出産している。皇后宮は、関白に入り臥され、我身姫を生み、女三宮は、権中納言に入り臥され、権中納言は女四宮と結婚し、その父の関白と結婚させられ、後涼殿を生む。後涼殿は、三条帝に寝所に侵入されながら中宮方の策略で入内が遅れ、生まざ女としての憂き目を見、宮の中將(右大臣)に入り臥され、初草姫を設けるが、この姫は後に実父に盗み取られてしまう。またこの女系について「いとせめて母に似たまひける族にて、いづれもかうたぐひなく人をも悩ましたまふなるべし」という条がある。その極端な母親似の美貌は人を悩ませ、密通と関わりずにはいられないこの女系に宿命的な感を受ける。

一方、中宮腹系について。いずれも皇后宮腹系のような美貌は持ち合わせず、密通と関連を持たない。性格的にまた容姿が明るい印象が強い。夫の寵愛は比較的劣るが、子室に恵まれ、常に高い地位を保つことができている。藤家出身の意識と我執の強さ、皇后宮腹系に対する対抗意識を持ち、特に中宮、女四宮は皇后宮腹系に圧力を加えている。そして、当然その裏には寵愛の深い皇后宮腹系に対する嫉妬の心が働いていることが指摘できる。

第一章では三系について述べたが、作者がこのような手法を取って描きたかったものは何であろうか。次の第二章で考察する。

第二章 創作意図

第一節 宿世観

この物語には「宿世」「契り」といった語が頻出するが、これに「さるべき」を加えた三語の頻出度を、『源氏物語』と比較すると、約一・七倍の頻出度となっている。つまり〈家系による人物の系統性〉に宿世観が大きく影響しているのである。また、次の二点を指摘する。

第一、物語としての統一性。本物語はこの時期の物語としては、年代や人物関係において破綻を示さず、摂関家、皇室系の対立・融和も最後まで描かれている統一性のある作品である。しかし、この問題の融和が作者の最も描かんとしたものとするのは疑問である。

第二、女の身の憂さを嘆く場面の頻出。密通場面における女の衝撃を描き続け、最後に最も意外性があり被害者意識の強い一品宮の描写を置くあたり、「抓み喰ひ」嫉妬する女四宮や夫との同衾を拒み傷つく複雑な藤壺、公平な態度を保ち静かな愛をそそぐ女を女帝という特別位置にまで発展させ、その嘆きや淋しさを描写するあたり、場面の頻出と共に女の身の憂さの取り上げ方が積極的である。

以上の考察から作者の最たる創作意図は、〈家系によって宿命的に繰り広げられる愛の諸相〉を女性の視点から描

出することにあるのではないかと考えられる。その愛の諸相の描写については第二節でみていく。

第二節 愛の諸相

(1) 密通の様相

皇后宮腹系は、宿命的に意に反して男性の心を迷わし、密通に巻き込まれる女系である。ここでは、我身姫、その娘一品宮、女二宮についても触れなければならぬ。

まず主人公我身姫について。我身姫は卷三末の東宮（我身帝）参り以後はほぼ脇役的な存在に転じるが、その動向は最終巻の卷八まで点描される。彼女もやはり容色美しく、妹と知らぬ権中納言や二宮から言い寄られる近親相姦の危機に会う。関白邸に引き取られた後は入内、出産と何も起こらないのだが、前述のような点描によって、我身姫の衝撃的な出生の秘密―関白と皇后宮の密通に拠る―は、卷八の我身姫の死まで読者の脳裏から離れない。つまりこの女系に繰り返される密通は、我身姫によって三代にわたる運命であることが示されたのである。また、殿の中將が秘密の子初草姫を引き取るとき「あやしの御まねびや」と、祖父関白が我身姫を引き取った振舞いが繰り返されていることとの指摘がある。この初草姫は第二の我身姫といえる。三代にわたる家系の運命のシンボルであった我身姫は死去し、第二の我身姫が登場した。つまり今後の新しい宿命的な女性達の愛の諸相の描出を予想させて、物語は終わるのである。

ところで、この女系でただ一人直接密通に巻き込まれな

いのが女二宮である。しかし彼女は第二の我身姫を迎える機に遭遇した。夫の殿の中將は、亡き昔の恋人との間の子と話したらしいが、女二宮は何の抵抗もなく受け入れた。

無意識であるに違いないが、密通により出生した第二の我身姫の出現を容易にしたことに、この女系としての因縁を見出すことができるのではないか。

次に一品宮と悲恋帝について。一品宮は、母我身姫の考えで気位高く育てあげられ、男女関係には極力潔癖で、女とでも親しく話をしない。二十六歳である。悲恋帝は、三条院と藤壺との間の一宮で十三歳である。悲恋帝は元服と同時に入内した姫君の容姿に不満であったが、その様な時、叔母である一品宮の可愛らしい美しさに触れ、恋心と男の衝動を募らせる。しかし一品宮は、普段の物づつみする心も甥である帝の幼い可愛らしさにひかれるのみで、少年の内面には気づかない。帝は幾度も一品宮の許へ訪れ、一層恋心を募らせる。以後、一品宮は度々帝との性交の夢に怯えるが、帝の可愛らしさに再び心を許したのも束の間、帝は一品宮の寝所に入り、思いを遂げた。「あな心憂、何ごとにつけても女の身ばかりゆゆしかりけるものはなかりけり」と暴力的に犯された女としての惑乱は頂点を極め、強く断食自殺を決意、約二十日後に出家、死を迎える。帝もその事を聞き、病に臥し、息絶えた。この一品宮の場合、この女系の中で特に異彩を放っている。今までの密通は、相手が懸想し俄かに現れて密通に及んでいた。しかし一品宮の場合、その対象は再三目の前にあった。が、一品宮は、

帝の心に衝動を募らせたことに気づかず、その育ちのせいで被害者意識もより強い。この話が繰り返された密通の最後に置かれただけに、逃れられぬ運命の強さと女が感じる身の憂さが一層強調されたように思う。

最後に作者が密通場面描写に力を入れていることに触れたい。特に卷三末で、二宮と我身姫の近親相姦の危機、女三宮と権中納言の密通を長文にわたって同時進行して描いているが、女の恐怖感が強く感じられ、興味深い。

(2) 嫉妬の様相

中宮腹系の女性は、三代にわたって比較的寵愛には恵まれず、美貌の皇后宮腹系に寵愛を奪われている。為に嫉妬の心を持った。ここでは特に描写のあざやかな女四宮と藤壺についてみる。

まず女四宮について。夫の権中納言は、結婚当時既に異母姉の女三宮と関係があり、女四宮は、夫に隠し立てされるだけに疑いは募る。折ごとに恨み言を言って泣き、何日も床から放さない。女三宮と同じ香を夫に感じた女四宮は、夫の袖まで押し当てて泣き叫ぶ。喜劇的な誇張もあり、笑いの効果もさることながら女四宮には興味深い点も多い。夫が打ち明けるのなら嫉妬しないが、隠し立てされるのが憎らしいという。また、大騒ぎして泣いていたかと思うと、急に夫のなまめかしさに情欲を感じ、部屋を暗くさせ、夫に抱きつき「抓み喰ひ」などして寝てしまう。このような描写を退廃的といってしまうが、夫への愛情、執着から来るこの行為にはむしろ自然なものを感じる。女

四宮はいやみを言ったり、夫にかじりついたり、床から転がり出してすねたり、常に忙しい。が、この家系に遺伝的といえる明るい容姿、性格と共に描かれるだけに、無邪気で顔をしかめたくなるものではない。一方、権中納言は女四宮に対してわずらわしさと離れ難さの同居した複雑な心境である。女四宮の言動は、夫の複雑な心境と相まって、ユニークで且つ嫉妬する女心を鋭く突いたものとなっている。

次に藤壺について。藤壺は、夫の三条院が最初から後涼殿を最も寵愛しているので、後涼殿が腹立たしい。しかし藤壺は東宮や二宮の将来を頼みとして、表面は穏やかに振舞い続け、夫の誘いもかわし続ける。後涼殿の美しさにならうわけではないと考え、夫の誘いは夫の性癖―情深い性格故に愛情を藤壺や女帝にも小分けにして、その場しのぎのやさしさをふりまく―によるものと考え、一人寝が一番だと考えるのである。藤壺は、夫の最たる愛情を自分のものにしたいが、その望みが叶わぬ今となっては、夫の癖で時折中途半端な愛情を受けても却って傷つくばかりなのである。愛情面での敗北感が変化する心理があざやかである。とうとう拒みきれずに共寝をした時には、満足しきっている夫に対して藤壺は、暴力的に犯された様な「御身に疵つきぬる心地」を感じた。この逢瀬で妊娠したが、表面は明るく振舞いながら、夫を近付けようとしない。出産後はたちまち三条院の手を逃れ、子供の将来に思いを馳せ、内裏に入ってしまう。藤壺は、自分の心身を傷つける夫よりも

子供や政治の方がよっぽと魅力的なのである。このように藤壺の場合は、嫉妬を根底に形を変え、表面的には夫を避けることになっている。

以上、二人ともこの家系に特徴的に我執の強さが影響しており、夫の愛情を強く自分のものにした気持ちは同じであろうが、表面にあらわれた形は同じではない。これは嫉妬する女心が微妙で複雑であることを示しているのではないか。

(3) 女帝の愛情表現

女帝は、嵯峨院と嵯峨女院の一人娘で三条院の皇妃である。三条院に対する愛情表現にやはり系統的なものがあり、その延長線上に女帝として善政を敷くべき運命が待っている。

系統的なもの（家系）をたどると、祖母は第一世代関白北方（女三宮が降嫁する前）、母は嵯峨女院である。関白北方は優れた寵愛ではなかったが、それなりに穏やかな生活である。関白が我身姫を引き取って愛育するのをも、人柄が素直で嫉妬しない。女三宮と結婚しても嫉妬せず、珍しく夫が訪れると素直に受け入れる。嵯峨女院は嵯峨院の寵愛深く穏やかな生活を送っている。藤壺が一宮を出産したとき、対立関係にある女三宮、後涼殿が胸ふたがる思いをしているのに対して、嵯峨女院や女帝は却って祝いを送っている。このように、この家系は一貫して控え目で穏やかで公平な態度を示しているようである。

女帝は皇后時代から実家に退出がちだが、夫の誘いには

素直に従う。また女帝となった為、夫と別居しなければならぬ珍しい身の上となったことを嘆く歌を贈る、とその愛情表現は素直で控え目である。女帝の実家の嵯峨院への行幸の折、三条院も出かけていくが、その際にも何も言わず、睦まじく休む。

このような愛情表現は、女帝となり善政を敷くにあたっても通じる。当人にとっては思いがけない位なのだ。「さるべきこと」つまり運命であり、近侍の者も公平に扱い、対立関係に巻き込まれることなく、理想的な政治をとっている。

ところで、女帝即位後の描写は、巻五、六であり、またこの二巻は同時進行であるが、巻六の方が誇張された女帝像が描かれている。公正で英邁な女帝が具体的な事例によって示され、風儀を正しくつとめた女帝が強調され、女帝に男性つまり「夫」としての三条院の影がない。これは巻六の中心人物である前斎宮（女帝の異母妹）の無邪気さ、色情症的狂態とより対比的に強く描く意図があったと考えられる。

女帝という位置に即かせたことは、前斎宮との対比と共に従来の愛情表現の態度を読者に強く再確認させることにもなっている。嫉妬せず、控え目で公平な態度を保ち、素直に愛情を受け入れ、また静かな愛情をそそぐ。これが女帝によってより強くこの家系に練り広げられる愛の相なのである。

(4) 色情症的な愛

(1)(2)(3)で家系による宿世観からみられる愛の諸相を述べたが、家系が敢えて特に描かれないのが巻六の前斎宮である。母は御匣殿でその存在と死が記されるのみ、祖母は記されもしない。巻五は巻御の並びの巻であり、作者が力を入れて描いたものと思われる。

前斎宮は、嵯峨院と御匣殿の間の皇女で女帝の異母妹にあたる。父嵯峨院が迎え入れるのを疎んじたため、生家の故母の邸で暮らしている。前斎宮には様々な狂態がみられ、特に同性愛や色情症的な面は目をひく。巻頭、前斎宮と女房の小宰相の「首を抱きてぞ臥したる」「うち泣き、うちかみ」「堪へ難げに笑ふ」「衣の下も静かならず」といった女の同性愛と解せる姿に、宮の中将も驚いて立ち去る。また、これに女房の新大夫が加わり、「三人寝たらん」といった状態にもなる。が、前斎宮の関心は女に限っていない。小宰相の兄が妹を訪れたときの異常なはしゃぎ方、垣間見したとき宮の中将が落とした男物の扇に対しての異常な関心と誰かまわず興味を持つ。この男物の扇の持ち主らしい男を見たという情報を得たときは、男を警戒する姿勢を見せながら心中ではわくわくして薫物をたきしめて男の来訪を待っている。また前斎宮は源中将と懇ろになるが、「いみじくもの憂きを隙なくひのくま川の巻きかくる」ような前斎宮の痴態に源中将も閉口してしまふ。これらの行動や心理を男子禁制の世界に年月を送った女性に設定したことは当を得た構想であったと思われる。ところで、このような前斎宮の同性愛や色情症的な面には、巻六全体を通してみて

嫌悪感や異和感を覚えなから不思議である。それは、前齋宮が子供っぽく無邪気でどうしても憎めない人のよさと共に描かれているからではないだろうか。前齋宮は以前は侍女中將を寵愛していたが、寵が小宰相に移ったため、中將が嫉妬して手荒な行動をとると、自分が主人であるにも関わらず「しほしほと泣く。財産管理をめぐる問題では女房達の方が大騒ぎして、本人は人のよい一面をみせるだけであるし、齋宮時代同様に浪費生活をして僧侶たちの服を作らせたり、気のいい性格である。その裏では現実的に事を運ばねばならぬ女房達がいるが、例えば少納言や小宰相は、前齋宮を疎んじるより、むしろ気の毒に思ったり世話をやく、といった前齋宮には放っておけない、憎めない無邪気な人のよさがあると思う。今井源衛氏が述べておられるように、「二面的で複雑な造型こそが齋宮像にリアリティを与え^{注1}」ている。誇張された女帝像との対比で多少誇張はあると思われるが、異和感や嫌悪感をもたせない真実味が感じられる。前齋宮は、家系が描写されただけに自由に動かし描くことのできる人物である。家系が描かれなかったのは、作者の意図である家系による宿命的な愛の描出が念頭にあったからであり、その枠を設けては描ききれない女の性の暴露の意図があったからである。作者は前齋宮を異常なもの、非難すべきものとして隔離しているのではない。真実なる女の性として描いているのである。前齋宮は愛の諸相に更に厚みを加えているのである。

以上、作者の最たる創作意図は（家系によって宿命的に繰り広げられる愛の諸相）を女性の視点から描出することにあるとして、(1)(2)(3)(4)の項を設けて述べてきた。周知の様に『源氏物語』は二世代、本物語は四世代にわたる物語であり、一種の大河小説といえるものである。作者が四世代も描いたのは、宿命的な女性達の愛の諸相を描かんがためであった。『我身にたどる姫君』は、『源氏物語』の影響を随所に受けながらも、文学の永遠の課題の一つである「恋愛」について、真剣に鋭い洞察力で、作者自身の意図をもって取り組まれている作品なのである。

注

注1 「中世物語の展開」

岩波講座『日本文学史』（昭和34年4月）所収

注2 「我身にたどる姫君」のユーモア

『語文研究』52・53合併号（昭和57年6月）